
この傷は絆

朝雛みか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この傷は絆

【コード】

N0834R

【作者名】

朝雛みか

【あらすじ】

体の傷が私とあなたを繋いでいる。

（前書き）

（短編5作目）

朝雛みか、渾身の5作目となりました。

『ヒドいことだとわかってる。それでもやめられないの。あなたが好きだから。』

それではどうぞ

体の傷が私とあなたを繋いでいる。

私は最近、かすり傷や切り傷みたいな怪我ばかりしている。

名前は北原もまり（キタハラ モマリ）。高校3年生だ。

でもね、この傷は自分で作っているの。あの人に会えるから。

「なんだ北原。また来たのか？ いい加減、怪我しないようにしろよ。」

そう、保健室にいくと会える人。アシカガ リクオ 足利陸生先生。

「だって、雪でコケちゃったんだもん。」

冬休みも開けた頃、もう入試と卒業がすぐ近くに待ちかまえている。

だから、先生に会える日もあと少ししかない。

だから、会える日は出来るだけ会いたい。

それに卒業しちゃったら、もうきつと会うことは出来なくなってしまうんだ。

私がなんでこんな、ボサボサ頭に黒縁メガネをかけた男を好きになつたのかというと、ほんの些細なできごとがキツカケだった。

それはある日、普段保健室に行くことなんかなかった私が、近年まれにみる頭痛と吐き気に襲われて、急いで保健室に雪崩れ込んだときだった。

「どうしたんだ、顔が真っ赤だ。」

と保健室にいた男が私に聞いてきた。
でも、私は頭が痛くて何も考えられなかったから、答えられないでいたんだ。

そしたら、私が不安に思つてると思ったのか、ボサボサの髪をかき揚げ、メガネを外して、

「大丈夫だよ、すぐによくなる。」

と言つて優しく笑つてきた。

その笑顔はダイヤモンドよりも輝いて見えて、何よりも綺麗な宝物のように感じた。

そして私は、ドキリときめき、確実に恋に落ちた。

それからというもの、誰も知らない私だけの宝物に近づくと、ただそ

れだけのためにしょっちゅう保健室に行くようになった。
でも、理由がないと保健室に入れない気がして、なにかと怪我をし
た。

私の体には怪我がどんどん増えていき、その傷は治っても傷跡にな
って、それもどんどん増えていった。

自分の体を傷つけるなんてひどいということはわかっている。
でも、それしか先生と私を近づけてくれる絆がなかった。

私はこんなことしてるなんて誰にも言えずにいた。これからも言う
つもりはない。

だって、このままずっと先生の傍にいたいから。

保健室って、意外といろんな子達が行き来する。

そんな中であつても先生の近くにいられる。

それだけで私は嬉しかった。

これは最近気づいたことだけど、保健室は授業をサボる常連もいれ
ば、怪我をした人、病気の人、その付き添いの人とかがいて、だい
たいの時間で保健室に生徒がいないことがない。

それなのに、今はいない。

私と先生以外、この部屋には誰もいなかった。
そんな状況に、

ドキドキしているのはきっと私だけだ。

と思っていたと、先生は言った。

「雪でこけたつて、。また傷が増えちゃうじゃないか。気をつけないと駄目だぞ、本当に。」

「しょうがないでしょ？雪って滑るんだよ。」

と私は軽く笑つておどけて見せた。

そしたら、先生は涙を浮かべながらフツと笑った。

え？なみだ？

泣いてるの？先生。

「せんせ、い？」

「あ、れ？おかしいな。元気づけるために笑わないといけないのに。北原が怪我ばつかしてるから。」

だからって、なんで泣いてんの？

「先生は心配なんだよ。これからもっと怪我が増えるんじゃないかって。」

「そうだね。増えるかも。」

私は少しボソツと言った。

「そんなこと言うな!!」

突然、怒鳴られて体がビクツと震えた。

「そんなこと言うなよ！なんで自分の体をもっと大事に出来ないんだよ！！」

その時、私は気づいたんだ。

この先生は全部知ってるんだ。それで泣いてたんだ。って。先生は続けた。

「この傷だって、この傷だって、これもこれも、全部自分でやってるだろ？」

俺は保健室の先生だぞ。故意についたか、そうじゃないかくらい、見ればわかる。

なんでなんだ。なんでこんな事するんだよ！！
もう止めるよ！こんなこと、もう止める！！」

優しい先生のいつもは見れない迫力に気圧ケオされて、私の目からは自然と涙が流れた。

「だって、」

私は、どうしようもない衝動から理性は飛んで、思ってることから次から次から出てきてしまう。

「先生に会いたいんだもん。」

何も無いのに保健室に来れないし、先生にもかまってもらえないじやん！

だからって、先生に好きだなんて言えないし、一生懸命理由を作っ

て先生に会いに来てたんだよ！
怪我すれば、保健室に来る理由になるし、先生に手当てしてもら
える。

それはいけないことなの？！
先生に会いたいただけじゃん！！」

次の瞬間。

先生の両手がバチンと音を立てて、私の頬を挟んだ。
両頬がジンジンとして痛い。そして、涙はまだ出てくる。

「そんな理由にならないだろ！
それでなんで自分を傷つけてもいい理由になるんだよ！！」

「そんなの知らないよ！
でも、じゃあ。」

どうしたら先生は私を見てくれるの！？」

先生の手はまだ私の頬にあって、先生の顔は私の前にあった。
だから、私は先生の目を睨んで言った。
すると先生はまた叫ぶ。

「もう見てるじゃないか！」

先生の言葉に自分の耳を疑った。寧ろ、意味が理解できなかった。

見るって、目にうつすって意味じゃないよ？

って言いたかったが、声が出てこない。

そして、先生は俯きまた目に涙を浮かべて今度は弱々しく言う。

「もう見てるよ……。」
「ずっと見てたよ。最初に会ったあの日から、ずっと、君を見てた。」

え？最初って、

「君の顔を見て、性格を見て、君のことをずっと気になってた。」

それじゃあ、先生も？

「でも俺は先生だ。だから見守ることしか出来なかった。それなのに君は嬉しそうに怪我してくるんだ。」

もう見てられないよ。こんなに思ってるのに、怪我ばかりしてくるなんて。」

「先生。」

ようやく口を通った言葉は、その一言だけだった。

「いつか、本当に、交通事故とかで死んじゃうんじゃないかって、本当に心配だったんだ。だから、」

「好きです！」

私は先生の言葉を遮る。

「私は陸生先生が好きです。ずっと、ずっと、最初に会って笑ってくれた時から！」

先生は一瞬顔を歪ませてから静かに頷いて、

「俺も好きだよ。」

と言い、私の頬に置いてあった手をそのままに、私の口に先生の薄い綺麗な唇を落とした。

私も自然と背中に手を回して抱きしめた。

軽いキスで終わるだろうと思ったキスは、角度を変えて、もう一度深く深く続けられた。

ようやく口が離れて、口から出た言葉は重なり、

「好き。」

次の瞬間にはまた小さな口付けを交わし、保健室にふたりのクスクスと笑う声が響いた。

今の私には、もう傷なんていらぬ。

先生のこの手が、この口が、私達の絆に変わったから。

.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0834r/>

この傷は絆

2011年2月21日20時31分発行